

【ワーク 2-1】「連携のコツ」解説

応答例 1 では、担任教師が「私が一番けんじ君のことをわかっているのに」と不満をもったり、自分を否定されたように感じるかもしれず、その後の連携やコラボレーションに支障をきたす可能性があります。また、応答例 3 は、担任教師が仮に発達障害の知識が不十分だったり、少し子どもの見方が偏っているかもしれない場合でも、そのまま見過ごしてしまう可能性があり、的確なコミュニケーションとはいえません。これらに対し応答例 2 では、担任教師が子どもをどのようにとらえているか情報収集しつつ、担任の気持ちを受け止め、大変さをねぎらいます。その上で、「本当のところ何が問題でどうするのがいいんでしょうね」という問いかけにより、担任教師に考えてもらいやすいように工夫されています。

児童生徒に発達障害やうつ病・統合失調症などの精神疾患が疑われる場合、保護者に対応を促したり保健所や教育相談センター、児童相談所など行政が運営している専門機関を紹介する必要があります。その時、特別支援コーディネーターとしては、担任教師はどのようにけんじ君を理解しているのかを把握し、それを否定するのではなく、かといって全面的に肯定するのではなく、「こういうふうな見方もあるかもしれません……」というように、担任教師を促す方が、より対等な専門家同士としてのスムーズなコミュニケーションを実現できるかもしれません。

さらに、援助者はある程度しっかりした原則や価値、システムを備えながら、同時に悩み、迷い、葛藤することができる「間」や「振幅性」を備える必要があります。相互の立場や意見の違いのなかで、厳密な共通項や一枚岩を求めるのではなく、少しゆるいくらいの連携の方が、かえって細く長く子どもや親のために援助を継続することが可能になるからです。